

「汚れつちまった悲しみに.....」は、中原中也（1907-37）の詩集『山羊の歌』に収録された、中也の代名詞とも言える一篇。人生の倦怠感、失恋による絶望・無力感、そして生き続けることへの諦念を綴った言葉で、どうしようもない状況に身を委ね、ただ時間が過ぎるのを待っている境遇を表している。中也の詩には、これまで多くの作曲家・ミュージシャンが曲を付けているが、石渡日出夫（1912-2001）によるシャンソン風の本曲は、彼の代表作となっている。

詩人・大木惇夫（1895-1977）は戦時体験を描いた、いわゆる戦争詩が有名だが、評伝、小説、翻訳、作詞など幅広い活動を行っており、多くの人が学生時代に歌ったであろう「大地讃頌」は特によく知られている。北原白秋の影響を受けたと言われる大木が、10代の頃の初恋と葛藤を書いたのが「淡彩抄」。そして、10篇の詩からなるこの連作詩に強く感化された、若き別宮貞雄（1922-2012）が1948年に付曲し、別宮の作品の中でも高い人気を誇る本作が生まれた。フランス留学前の別宮の感性が冴え渡っており、なかでもピアノ伴奏パートは雄弁かつ精緻で、本格的なピアノリズムが発揮されている。

大阪出身の三好達治（1900-64）は、昭和に活動した詩人、翻訳家、文芸評論家。知的で清冽な彼の叙情詩は、音楽的素材としても多用された。そんな三好の詩集『測量船』に収められた「物語」「乳母車」を用いて、木下牧子（1956-）が作曲したのが「三好達治の詩による二つの歌」。抒情的な旋律と厳粛で厚みのあるピアノ伴奏によって、孤独でありながら、どこか懐かしい日本を感じさせる作品に仕上がっている。